

# 徳富蘇峰記念館

## 目録 (12)

### 「四文豪と徳富蘇峰」

～ 逍遙・鷗外・漱石・露伴 ～

展示期間◇平成六年一月七日～十二月二十日

今年には坪内逍遙、森鷗外、夏目漱石、幸田露伴の四文豪と蘇峰の係わりを主に展示した。逍遙、鷗外、露伴は明治二十一年九月、蘇峰が主唱して開いた「文学会」に出席していたり、代表的な作品を「国民之友」に発表したりと、いろいろな面での交遊の背景がわかるので、蘇峰と馴染みの人物という感がある。

それにひきかえ、漱石との係わりについては白紙の状態であった。今回初展示した漱石の手紙は、昨半夏、書簡整理の第二段階の再点検の際、撮影済みと思いきんでいた巻物仕立ての書簡の中に見つけたものである。この手紙の背景を調べ、蘇峰と漱石の交遊が、いったいどのようなものであったかを知りたい。漱石・蘇峰共通の知己の書簡を展示し、五人（四文豪と蘇峰）の交遊図を書簡史料から作り、五人の年譜を重ねて一つの略年譜を作ることなどによって、何かが見えてくるのではなからうか。

これまで蘇峰と文筆家といえば、明治二十年代の「国民之友」と「文学会」を中心に紹介して来たが、今年には明治三十八年『吾輩は猫である』を発表

した漱石が加わったので、明治四十年代に目を向けなければならなくなつた。「国民之友」隆盛期から約十五年も時代が移り、それにつれて蘇峰と文筆家との新しい出会いも多い。従つて今回は初展示の書簡が多い。

書簡の他には、漱石が参禅したときの円覚寺の管長・釈宗演の達磨と、禅僧晦巖、蘇峰、堅山南風の達磨、蘇峰の達磨を手本としたと語っていた棟方志功の達磨を並べて飾つた。蘇峰の恩師勝海舟、新島襄の揮毫、橋本雅邦の「四季山水」、平福百穂の「白梅」、川端龍子の「蘇峰立像」などを展示してある。

平成六年二月

〈特別展期間〉一月七日～十二月

二十日までの月・水・金曜日

（二月のみ土・日曜も開館  
八月の第三、四週は休館）

財団法人

徳富蘇峰記念塩崎財団

理事長 竹越起一

学芸員 高野静子

次の順序で展示史料を紹介する。

一、漱石の書簡の読み 要旨 横川和尚の『百人一首』

二、漱石の書簡の背景 明治天皇と漱石・蘇峰

三、漱石・蘇峰の知己の書簡(表)

四、当館所蔵の書簡による蘇峰、逍遙、鷗外、漱石、露伴の

交遊図(表)

五、四文豪と蘇峰の略年譜

六、展示書簡一覽(表)

漱石は、『吾輩は猫である』『坊ちゃん』など、日本人が一度は読んできたであろう歯切れの良い日本語で、胸がすくような正義感と、ユーモアに富んだ小説を書いた人である。人物評の上手な蘇峰は、逍遙、鷗外、露伴、二葉亭、紅葉、美妙、芥川、透谷等について折りに触れ語っているが、これまで探した範囲では、漱石についてはなにも語っていない。間接的な記事であるが、漱石についてただ一つあるのは、漱石の葬式の時の蘇峰の姿を菊池寛が見て、感激した話を、広瀬喜太郎氏が『蘇峰先生』(蘇峰会高岡支部 非売品 昭和十二年)に次のように書いているものだけである。

かつて予は菊池寛の講演を聴いた時、氏は言うた。大正五年夏目漱石の告別式の時であった。斎場の一隅に、しつらひられた新聞記者席には何の故か、一人の記者も着席しなかつた。唯一人そこには白髪童顔の蘇峰先生を見出し出した。その時は真に心から、頭が下る思ひした。全く新聞社の代表として、或は新聞記者の総代として、座りたる観があつた。又實際座りたる感じもした。『誰も居なくても、乃公はここに居るぞ』と言つたような、実に先生の姿が崇高に見えて、此の時ほど自分は新聞記者の誇りを感じたことはない、と

いふ意味のことを言うた。

漱石は五十歳で逝去したので、此の時蘇峰は五十四歳であつたことになる。漱石は朝日新聞社の人であつたので、記者席にだれもいなかったとは思えないが、蘇峰は漱石の葬式に、菊池寛を感動させるような姿で臨んでいたことになる。では漱石は蘇峰をどう見ていたのであろうか。その一端を今回紹介する一通の書簡は示してくれるであろう。

一、夏目漱石の蘇峰宛書簡(明治四十二年二月九日付)

拝啓 御刊行の横川和尚撰五

山百人一首二百部のうち第百五。

十号先日高浜虚子の手より

正に落掌 難有御礼申上候

日常御多忙の折 這般の風流

に閑日月を弄せられ候御余裕

羨敷限に候 正是雪村老僕

の鏝湯炉炭起清風の一句に

相当するものと存候 頃日机辺

に集積する所の書巻は悉く生存競争

の臭味有之久振にて此好事の

雅集に接し陋懐頓に一椀の

苦茗を喫したるの感有之 ただ

俗用蠟集 静かに緬邈の趣を

致す能はず 玉腕和尚の軒前

修竹緑婆娑 玉立三竿不用多

好是満山風雨夜 虚心相笑亦他無

の一首を挙げて感謝の辞  
に代へ申候 早々 頓首

二月九日

夏目金之助

蘇峯先生 侍史

※注 解説には成田賢太郎氏のご助力をいただいた。

「漱石山房」銘入り原稿用紙 墨書

封筒表 京橋区日吉町四 国民新聞 徳富猪一郎様

封筒裏 牛込早稲田南町七 夏目金之助

### 〈要旨〉

ご刊行の、横川和尚が撰した五山の僧による『百人一首』二百部のうち、第五百十号を高浜虚子から受け取った。ありがたくお礼申し上げる。日常お忙しいなか、今回のような風流な仕事に月日をお使いのご余裕、羨ましい。正にこれ雪村老僕の「鏝湯炉炭起清風」の一句に相当するものと思う。日頃私の机の周りに集積する書物は、ことごとく生存競争の臭いがするが、久し振りにこのような雅集に接し、老いた心に、一碗の洪茶を飲んだような気がする。私は俗用に追われ、静かに遙か未来を思いやることさえできない。玉畹和尚の「軒前修竹緑娑婆 玉立三竿不用多 好是満山風雨夜 虚心相笑亦他無」の一首を挙げて、復刻本を實行なされた貴方への感謝の辞にかえます。

漱石の書簡は『百人一首』への礼状である。『百人一首』は、京都五山の横川景三和尚（一四二九—一四九三年）が小倉百人一首にならい、五山のすぐれた百人の僧の詩を撰んで『百人一首』としたもので、室町時代に横川和尚が手写したといわれる。それを所蔵していた蘇峯が、三百部写真石版にして公刊したものである。

書簡のなかにでてくる雪村老僕は、雪村友梅（一二九〇—一三四六年）のことで、新潟県生まれの五山の禅僧である。『百人一首』にも選ばれており、

『百人一首』に付属されている「百人小伝」に、漱石の引用した一句がでてくる。雪村が元に留学していた時、日本人であることから、言譚の嫌疑で二十二年間投獄され、想像に絶する刑罰を受けた。その刑のもとでも折りを朗誦していたので、刑吏たちが感服し、朝に頼み、死を免がれることができたという。多忙のなかで、『百人一首』を復刻した蘇峯を、漱石は「鏝湯炉炭起清風」と褒めているのである。そのうえ、玉畹和尚の一首を引いて又褒めている。玉畹も『百人一首』の一人で、別名凡芳といい、室町時代の禅僧で世を隠れて志を守り、周囲の諸兄が開堂演法を勧めたが辞退し、足利義持が乞て南禅寺に行かせたがすぐに退いたような僧であった。そこで漱石が引用した一首がでてくるのである。

南禅寺のような大きな寺よりも「軒前の竹の緑の葉がひらひらと舞うを眺め、夜山の風雨に心を虚にし、唯一人で生活するのも良い」という。蘇峯が『百人一首』を復刊した仕事を、本物を愛する地味な仕事であり、世俗的な臭味のない、隠れた好事と賞賛し、感謝しているのである。

### 横川和尚の『百人一首』

森大狂校訂 民友社出版 明治四十二年一月 金一円

横川和尚の手鈔にして、成簀堂（徳富文庫）の珍襲の一なり。三百部を印刷し、内二百五十部を発売せり。番号記入、蘇峯学人の記名捺印為せり。蓋し本書を以て、成簀堂珍襲本を原本の儘、写真石版に附して公刊の嚆矢と為す（『民友社創立三十年史』大正六年九月十五日 民友社発行による）。

当館にある『百人一首』は、蘇峯が富岡鉄斎に贈呈した第六十二号のものである。巻末には蘇峯の筆で、昭和十四年秘書の八重樫女史が、白木屋の古書展覧会で発見して、重値を投じて得たものであると書いてある。巻頭には「是書刊行三百部之内第六十二号 明治四十二年二月初一 蘇峯学人 呈 富岡先生」とある。漱石に進呈したものにも、同じように書かれていたのであろう。

成簀堂文庫を所蔵しているお茶の水図書館には、どのような『百人一首』があるのだろうか。司書の小高英夫氏に問い合わせたところ、成簀堂には第一号が所蔵されていること、復刻の原本となったものは、『新修成簀堂善本書目』の二七六頁に、室町中期写本として登録されているという。原

本の巻首にある蘇峰の書き込みは明治三十九年二月二十一日に書いたもので、大意は次のようである。「此の書は鎌倉報国寺で得た百人一首で、五山詩僧の絶句である。撰者横川は南禅寺の僧で、応仁の乱の後いろいろの寺を転じた。この書は横川の手稿か。其清飄洒脱なところが珍しい。後世この書を手にとるものは宝愛珍惜すべきである」。蘇峰が明治三十九年に手にいれたときから珍重していたことがわかる。巻末には校訂者である森大狂が蘇峰先生が常にこの書愛してたと記している(小高氏の教示による)。

漱石が蘇峰をどのように褒めたのは、漢詩に感激したためであろうが、横川和尚の手で書かれた百首の漢詩は、私の力では到底読むことはできない。復刻された『百人一首』には、「百人小伝」が付いている。これは活字であるので読むことができる。五山の偉い僧でも「行状不祥」の人も多い。百人の内十七名が行状不祥である。このような状況の中で、あえて「百人小伝」を付けることを実行した蘇峰に、私も感謝したい気持である。「百人小伝」がなかったら、漱石の書簡をよく理解できなかったであろう。

蘇峰は『成賢堂善本書目』の序文に、「予の書物道楽熱の最も騰上したる際は、予の最も多忙なる時であった。具体的に云へば、明治三十七、八年から明治四十四、五年迄であったと思ふ」と。日露戦争中、号外を出して、その後少しの時間を惜しんで古書店琳琅閣の座敷で、希書を探したと書いている。蘇峰は己にとつての書物の先覚者として大槻如電、内藤湖南、上村閑堂、森大狂、島田翰、大野洒竹、寺田望南等の諸氏をあげている。若い書誌学者島田翰の『古文旧書考』を五百部、民友社から出版したのが明治三十八年三月であり、『百人一首』の復刻が四十二年二月である。まさにその忙しい時期であったことがわかる。

横川和尚の『百人一首』諸士礼状 (巻物 十六メートル 昭和七年表装)

礼状を書いている二十三人を、初から順序通りに記す。

- (一) 西園寺公望 (政治家・公爵) 封書 明治42年2月11日付
- (二) 釈 敬俊 (東慶寺、釈宗演の弟子) 封書 2月6日
- (三) 芳川 顕正 (官僚・政治家) 封書 2月13日
- (四) 石黒 忠恵 (陸軍軍医総監・子爵) 封書 2月7日

- (五) 末松 謙澄 (政治家・法学者伊藤博文の女婿) 封書 明治42年2月11日付
- (六) 森 槐南 (漢詩人・宮内大臣秘書官) 封書 2月25日
- (七) 佐藤 進 封書 2月18日
- (八) 高島 張輔 封書 2月8日
- (九) 落合 為誠 (漢詩人・大正天皇の侍従) 封書 2月7日
- (十) 鈴木 子順 封書 2月6日
- (十一) 永坂 周二 封書 2月12日
- (十二) 夏目金之助 (小説家) 封書 2月9日
- (十三) 永井久一郎 (荷風の父、封筒のみ) 封書 2月7日
- (十四) 田辺新之助 封書 2月11日
- (十五) 湯浅 吉郎 (神学者・詩人・京都府図書館長) 封書 2月8日
- (十六) 神山 潤次 封書 2月5日
- (十七) 木久正謙吉 封書 2月9日
- (十八) 渡辺 信 封書 2月6日
- (十九) 徳富 一敬 (蘇峰の父、漢詩人) 葉書 2月2日
- (二十) 大槻 如電 (僧・書籍収集) 葉書 2月11日
- (二十一) 富岡 謙三 葉書 2月7日
- (二十二) 幸田 露伴 (小説家・随筆家) 葉書 2月9日
- (二十三) 森 林太郎 (軍医・小説家・評論家) 名刺 2月9日

二、漱石の書簡の背景

漱石と蘇峰の関わりは、明治四十一年十月「国民新聞」紙上に「国民文学欄」が設立され、高浜虚子がこれを主幹したことに始まったと思われる。

四十年四月、漱石は東京帝国大学講師から朝日新聞社へ招聘され、月給二百円で朝日新聞に入社した。明治四十二年十一月、「朝日新聞」は、「国民新聞」に一年後れて「朝日文芸欄」を設けるに至った。其の主筆は漱石であった。虚子と漱石は子規を含めた俳句仲間であり、虚子の主宰する「ホトトギス」には漱石の『吾輩は猫である』(明治三十八年)、『坊ちゃん』(明治三十九年)が発表されていた。人気作家になり、池辺三山の人柄に感銘して、

東京帝国大学講師の職を蹴って、朝日新聞に入社を決意したといわれる漱石に、蘇峰が興味を持ち、虚子を通して『百人一首』を進呈したことは、自然のなりゆきであろう。漢詩の好きな漱石は『百人一首』をすぐに読み、すぐに礼状を書いたことが日付から察せられる。

明治四十二年の二月といえ、漱石が『永日小品』を書いていた時である。そのなかの「火鉢」には、仕事が山ほどあるが、かぢかんで仕事をする気になれない、寒くて億劫で、火鉢から手をはなせないと書いてある。また胃が痛いとある。明治四十二年一月頃から六、七月頃までの漱石の「断片」に、「夜具呼吸があたる襟へ霜が出来」「醬油が氷る。味噌が氷る」とある。今の冬よりずっと寒い様子と、寒さに弱い漱石の姿が浮ぶなかで、すぐに蘇峰に礼状を書いたことは、漱石の熱意を伝えるものであろう。

手紙の用紙であるが、巻紙でなく、漱石山房の原稿用紙が使われている。漱石の書簡を、『漱石全集』や鎌倉文学館の「鎌倉と明治文学者」の冊子、八木書店の「古書目録」などで二十通ほど写真版で見たが、全部巻紙であった。最近になってようやく『森鷗外・夏目漱石・三木露風未発表書簡集』で、漱石山房原稿用紙に書かれた手紙を見ることができた。それは大正四年一月四日付の佐々木信綱宛のものである。また東京近代文学博物館の目録「漱石火山脈展」にも、一通原稿用紙の手紙があった。それは大正五年七月十九日付の読者への返信書簡である。それにしても原稿用紙に手紙を書いたのは少なかつたようである。漱石は漱石山房の原稿用紙（橋口五葉図案）を明治四十一年から用い始めたそうであるから、蘇峰への手紙にそれを用いたのは蘇峰に自分専用の原稿用紙を見せたかったのかもしれない。

岩波書店の「函書」(一九九三・一〇)の漱石特集号に掲載されている井上ひさし、奥本大三郎、関川夏央氏による「漱石をめぐる」という座談会で、漱石が作品のなかで、ちゃんとした手紙(父親に金の話をする)は巻紙で、堅苦しい候文でなければ、と書いていることが話題になっている。漱石が蘇峰に原稿用紙で手紙を書いたことは、形式よりも気持を優先した、飾りけのない新聞屋の姿とつてよいであろうが、原稿用紙に言文一致の文ではなく、難しい語句や漢詩まじりの候文が書いてあるのは、漱石の書簡のなかでも珍しいもののように感じる。

小宮豊隆は「漱石は如何なる場合でも、自分の心にもない事は書かなかつた」(『書簡集解説』『漱石全集』十四卷 岩波書店 昭和四十一年)と言っている。私もそう思うが、唯一通しかない漱石の手紙を時間をかけて読んだ後、当惑してしまった。それは、漱石が雪村や玉畹和尚の生涯を表す漢詩を引用して、『百人一首』を復刻した蘇峰を褒めていることが、「白髪三千丈」的に、誇張しすぎているように感じたからである。しかし再三漱石の書簡を眺めていると、生存競争に関係ない雅集に感激した漱石の、当時の正直な心境であつたように思えてきた。漱石と蘇峰の交遊の接点は、漢籍漢詩、五山文学であつたことが理解される。そのうえ珍蔵本を復刻した出版人としての蘇峰を賞賛していることは、さすがに漱石である。二十三人の礼状はそれぞれが達筆で、内容も書誌学的なものや、最高の食事に食後の抹茶までついたような豪華本だと喜ぶ愛好家のものなど、さまざまである。『百人一首』は、蘇峰が限定復刻した最初の本であつたので、礼を尽くした漱石の書簡が、蘇峰にとつて大きな励ましとなつたことは確かである。漱石の「和漢書目録」には、『百人一首』をはじめ、四冊の民友社出版の本が記録されている。大正三年、限定出版された『月江和尚録』、同年出版の『白隠和尚遺墨集』、そして蘇峰の随筆集で、平福百穂の絵と合作の『山水随縁記』(大正三年)の限定本の特製がある。これらの本は蘇峰が漱石に進呈した可能性が高い。

### 明治天皇と漱石・蘇峰

漱石と蘇峰は明治天皇が好きであつた。漱石は『ころ』でも『三四郎』でもそれを示している。蘇峰は明治天皇の御代に生きて、私はこれ以上の幸せなことはないといつも語っていた。漱石も蘇峰も同じ明治の青年であつたのである。このことをふまえて、蘇峰が登場する漱石の一通の書簡を紹介しよう。

森次太郎宛 漱石書簡 大正元年八月八日付(『漱石全集』第十五卷 昭和四十二年 岩波書店)

暑中御変もなく結構に存候 小生とうにかかうにか生き居候 御安心可被下候 明治のなくなつたのは御同様何だか心細く候

朝日の議論記事 三山<sup>2</sup>在世の頃よりは劣り行くとの御感 左もあべきなれど、小生は不注意故夫程も眼につかず候 三山のいる頃から云ひたき事は数々候ひしのみ 国民は此度の事件にて最もオベツカを使ふ新聞に候 オベツカを上手の編輯といへば彼の右に出るもの無之候 いづれにしても諸新聞の天皇及び宮庭に対する言葉使ひ極度に仰山過ぎて見ともなく又読みづらく候 先は御挨拶まで

八月八日

金之助

草々

圓月<sup>5</sup>様

※注 1 明治天皇の崩御にともなう明治時代の終わり 2 池辺三山

朝日新聞の主筆 明治四十五年一月死去 3 国民新聞 4 国民新

聞主筆は蘇峰 5 森次太郎の号

明治天皇が崩御された時の、新聞報道の言葉使いについての漱石の意見である。蘇峰は「オベツカ」でなく、衷心から敬語を使って報道したのだと思うが、漱石には「仰山過ぎて見ともなく」感じられた様である。明治天皇が七月三十日に崩御された日、蘇峰は「奉悼の辞」を書いた（国民新聞に掲載）。漱石は八月一日「明治天皇奉悼之辞」を書いた（『法学協会雑誌』に掲載）。両文を読んでみよう。蘇峰の一部を紹介すると、

六千余万臣民の熱誠を凝らしたる祈禱も、今は其の効なく、人事悉く盡し来りて、逐ひに天命の如何ともす可らざるに際す。嗚呼哀哉 嗚呼痛哉。（中略）内は封建の制を廢し、四民の階級を夷げ。茲に国家的一致と、国民的統一の実を挙げ給ひ。外は列国と対峙し、皇威を四境に示し（中略）国民皆兵の主義を定め、他方に於ては、国民教育の制度を繕め。（中略）吾人は只た自から、明治聖代の民たりしを以て、至上の幸福と信せずんばならず。嗚呼哀哉、嗚呼痛哉

（『蘇峰文選』）

というように、明治天皇の功績を揚げて、「嗚呼哀哉、嗚呼痛哉」と結ぶ文を六回繰り返している。原文を読むまでは、蘇峰がもつと難しい言葉を用いているかと想像していたが、読んでみると、素直に悲しみを表現している文である。では漱石のはどうであるか。全文を紹介しよう。

過去四十五年間に發展せる最も光輝ある我が帝国の歴史と終始して忘るべからざる大行天皇去月三十日を以て崩ぜらる。天皇御在位の頃学問を重んじ給ひ明治三十二年以降我が帝国大学の卒業式毎に行幸の事あり日露戦役の折は特に時の文部大臣を召して軍国多事の際と雖も教育の事は忽にすべからず其局に当る者克く励精せよとの勅諭を賜はる 御重患後臣民の祈願其効なく遂に崩御の告示に会ふ我等臣民の一部分として籍を学界に置くもの顧みて天皇の徳を懐ひ天皇の恩を憶ひ謹んで哀衷を卷首に展ぶ （『漱石全集』第十一卷）

漱石は「西洋の言葉に翻訳のできないやうな文字は、一つも使はなかつた、ただ率直に誠実に、奉悼の意を表現した」と原稿を依頼された山田三良に言ったとある（『漱石全集』第十五卷注解）。また小宮豊隆の解説によると「これは当時奉悼文中の明文として宣伝された」そうである。なぜ漱石が「国民新聞」の文を仰山過ぎるといったのかは、当時の国民新聞が連日「陛下御重患の公示」「御様態漸次順調」「御病状再び増進」（三篇とも東京たより）などでうめられていたからだろうか。それにしても蘇峰の報道を「オベツカ」と書いていることは、思いがけないことである。「くどい」とか「仰々しい」とか評されたのなら理解できるが、「オベツカ」だけは、蘇峰の真意を理解していない者の言葉であるように感じる。しかし漱石が「国民新聞」の報道を「オベツカ」と表現していることは、私信の中でこのことであり、あまりこだわらなくてよいのかもしれない。蛇足ながら、これは私信である書簡が、後世活字になった恐さを示す例ともいえよう

漱石の死後も森次太郎をはじめ、漱石の弟子や娘婿、松山中学時代の教え子や、漱石の十弟子など、多くの漱石の知己が蘇峰に手紙を出している。漱石と蘇峰は相応の付き合いがあったと思われる。蘇峰が漱石の葬式に出たことを確認できる書簡がある。それは森次太郎の昭和二十年十二月五日付の書簡である。漱石の葬儀で宗演禪師の偈（仏教で、仏をほめ称え

る韻文)が感動的であったこと、生涯を通して最も敬服した葬儀であったこと、耶蘇教の牧師達にあれほどの芸の出来る者はないほどであったことなどの思い出を書き、同じく出席していた蘇峰に、宗演の偈の第六句の七字を記憶しているかどうかを尋ねている。森次太郎は松山の人で、俳人らしい。蘇峰への六十七通の書簡から、万年青年のような、好人物が浮かんでくる。手紙にもよく漱石、子規、虚子の思い出が語られている。漱石の書簡集には次太郎宛の書簡二十二通が収録されている。

### 三、漱石・蘇峰共通の知己

次の表は、『漱石全集』の「書簡集」(第14・15巻 岩波書店 昭和41年)に収録されている人名を、当館の来簡目録に照合し、両方にある人名を抜き出したものである。繰り返しになるが、漱石から手紙をもらい、そして蘇峰に手紙を出した人がこれら四十六名の人である。

例を一つあげよう。松崎天民は新聞記者で、苦学中蘇峰に見出され国民新聞の記者になり、社会ルポの先駆者となった人である。蘇峰への書簡は9通ある。昭和五年の手紙は子供の死去に際し、蘇峰自ら弔問し同情を示してくれたことを感謝している。漱石の書簡は大正二年十一月付のもので、天民の妻が亡くなったことへのおくやみと、病気である子供に何か送りたいので、と年齢を尋ねている。漱石と蘇峰の優しい一面を、天民への両者の書簡が伝えている。表の通数は蘇峰への書簡数である。

姉崎 正治(嘲風) 京都 一八七三—一九四九

3通 大正2 昭和1(封書3 手書2 印刷1)

宗教学者 東京帝国大学付属図書館長「帝国文学」創刊

ハーバード大学などで教え日本文化を海外に紹介。

安倍 能成 愛媛県 一八八三—一九六六

1通 昭和1(封書1 手書1)

教育者 哲学者 学習院長 文相

漱石の東京帝国大学文科講師在職中の学生 平和運動の発展に尽くした。漱石の十弟子の一人と言われる。

麻田駒之助 京都 一八六九—一九四八

6通 大正4 昭和2(封書5 葉書1 手書5 印刷1)

編集者 出版業者 本願寺付属の「反省雑誌」の経営を命ぜられ、途中「中央公論」と改名。大正元年、中央公論を独立させ社長。

有島 生馬 神奈川県 一八八二—一九七四

2通 昭和2(封書1 葉書1 手書1 印刷1)

洋画家 小説家 島崎藤村に傾倒。「白樺」同人 有島武郎の弟、里見淳の兄。

池辺 三山(吉太郎) 熊本県 一八六四—一九二二

9通 明治9(封書9 手書9) このうち8通は中島司の謄写。

新聞記者「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」の主筆。陸羯南、徳富蘇峰とともに明治三大記者といわれた。細川護良に従いフランスに留学。漱石は池辺に会い、朝日新聞社に入社する決心をしたといわれる。

巖谷 小波(季雄) 東京 一八七〇—一九三三

21通 明治10 大正2 昭和5 不明4(封書17 葉書4 手書19 印刷2)

小説家「こがね丸」などの童話作家 硯友社同人 博文館に入社。「少年世界」の主筆となる。「関係文書3」に収録。

岩波 茂雄 長野県 一八八一—一九四六

3通 昭和3(封書2 葉書1 印刷3)

岩波書店創立者 漱石の『こころ』を処女出版。漱石の東京帝国大学文科講師在職中の学生。漱石の十弟子の一人と言われる。

内田 魯庵(貢) 東京 一八六八—一九二九

7通 明治3 大正2 昭和2(封書5 葉書2 手書7)

評論家 小説家 丸善顧問 蘇峰に西鶴の面白さを知らせる。短期(八ヶ月)初期国民新聞社員、当時の文学者の人物評は定評がある。「罪と罰」「復活」などロシア文学を翻訳。「文学会」出席『関係文書1』に収録。

上田 恭輔

7通 大正3 昭和4 (封書5 葉書2 手書7)

大連満鉄 大毎の東亜部で働く。

太田 正雄……木下李太郎を見よ(同一人物)

大村 西崖(無記庵) 静岡県 一八六八—一九二七

6通 大正6 (封書4 葉書2 手書6)

美術史家 東京美術学校彫刻科教授 美術書出版にも努めた。

落合 為誠(東郭) 熊本県 一八六六—一九四二

163通 明治26 大正57 昭和61 不明19 (封書158 葉書5 手書162 印刷1)

漢詩人 宮内省図書寮 大正天皇の侍従 蘆花が善人帖に最初に

書いた人。熊本で漱石が一時落合の家を借りていた。

金子 薫園(雄太郎) 東京 一八七六—一九五一

11通 大正1 昭和10 (封書10 葉書1 手書11)

歌人 落合直文に学ぶ。

木下李太郎 静岡県 一八八五—一九四五

5通 大正3 昭和2 (封書4 葉書1 手書4 印刷1)

詩人 劇作家 評論家 医学者 鷗外と同じく医学上の業績のほか幅広く活躍。「スバル」派詩人として知られる。

斎藤 茂吉 山形県 一八八二—一九五三

28通 明治1 大正5 昭和22 (封書20 葉書8 手書24 印刷4)

「アララギ」派の歌人 精神科医 青山脳病院院長 伊藤左千夫に師事。文化勲章受賞。

佐々木信綱 三重県 一八七二—一九六三

160通 明治32 大正8 昭和101 不明19 (封書152 葉書8 手書155 印刷5)

歌人 国文学者 蘇峰の歌を添削、夫人雪子は蘇峰の親戚。短歌結社「竹柏会」を起し「心の花」を創刊。書籍収集での友人。「校正万葉集」を完成。

宗演(洪岳) 福井県 一八五九—一九一九

40通 明治4 大正33 不明3 (封書23 葉書17 手書40)

禅僧 歌人 円覚寺派管長 建長寺派管長も兼ねる。福沢諭吉に学び、その勧めでセイロンに留学、禅を世界的に広めた。政・財

界、知識人への講義を通して多くの信奉者を持った。漱石も参禅。

杉村楚人冠(広太郎) 和歌山県 一八七二—一九四五

9通 大正4 昭和5 (封書5 葉書4 手書7 印刷2)

新聞人 評論家 本願寺の「反省雑誌」を編集。国民新聞のために翻訳。朝日新聞社に入社、イギリスに特派される。外国人交際係り。

杉浦 重剛 滋賀県 一八五五—一九二四

1通 明治1 (封書1 手書1)

教育者 雑誌「日本人」の発刊に尽力。東亜同文書院院長 日本中学校校長として若者を育てる。東宮御学問所御用掛。

関根 正直 東京 一八六〇—一九三二

1通 不明1 (封書1 手書1)

国文学者 教育家 中村正直に私淑して改名。「古事類苑」の編纂に参画。

高浜 虚子(清) 愛媛県 一八七四—一九五九

17通 明治2 大正2 昭和12 不明1 (封書9 葉書8 手書13 印刷4)

俳人 小説家「ホトトギス」を主幹。国民新聞の「国民文学欄」担当。正岡子規、夏目漱石との交友は有名。杉田久女の師。

瀧田 樗陰(哲太郎) 秋田県 一八八二—一九二五

5通 明治2 大正3 (封書3 葉書2 手書5)

「中央公論」の主幹 名編集長と言われた。吉野作造と蘇峰の口述筆記は必ず受け持った。短期国民新聞記者となったこともある。蘇峰の家で行われた「水曜会」と漱石の「木曜会」に同時に参加。

田山 花袋(録弥) 栃木県 一八七二—一九三〇

1通 大正1 (封書1 手書1) 中島司の謄写による。

小説家 「蒲団」は自然主義文学の代表作といわれた。

近松 秋江 岡山県 一八七六—一九四四

8通 昭和8 (封書5 葉書3 手書7 印刷1)

小説家 評論家

土井 晚翠(林吉) 宮城県 一八七二—一九五二

7通 昭和7 (封書6 葉書1 手書6 印刷1)

詩人 国文学者

坪内 逍遙(雄蔵) 愛知県 一八五九—一九三五

18通 明治14 不明4 (封書14 葉書4 手書14)

評論家 小説家 劇作家 『シエークスピア全集』の翻訳完成。「文学会」の重鎮。「国民之友」に「細君」を発表。「関係文書1」に収録。

戸川 秋骨(明三) 熊本県 一八七〇—一九三九

29通 大正5 昭和23 不明1 (封書28 葉書1 手書28 印刷1)

評論家 英文学者 島崎藤村らと「文学界」を創刊。

徳田 秋声 石川県 一八七一一一九四三

1通 昭和1 (葉書1 印刷1)

小説家 紅葉の門下。

徳田 浩司……近松秋江を見よ(同一人物)。

鳥居 素川(赫雄) 熊本県 一八六七—一九二八

1通 大正1 (封書1 手書1)

佐々友房に学ぶ。新聞「日本」に入り、従軍記者として活躍。後、三山の招きで大阪朝日新聞社に入る。漱石の朝日新聞入社を村山龍平に勧めた人。東の三山、西の素川と言われた。

中村 不折(鉦太郎) 東京 一八六六—一九四三

3通 昭和3 (封書3 手書3)

洋画家 書家 漱石の「吾輩は猫である」の挿画、鷗外の墓表を書いた人。老舗中村屋の商標も書いた。

野上豊一郎(白川) 大分県 一八八三—一九五〇

1通 昭和1 (封書1 手書1)

英文学者 能楽研究者 漱石の第一高等学校講師在職中の生徒。漱石の十弟子の一人と言われた。妻は野上弥生子。

野村 伝四

1通 明治1 (封書1 手書1)

漱石の東京帝国大学文科大学講師在職中の学生。漱石の門下生。長谷川時雨(康子) 東京 一八七九—一九一四

4通 昭和4 (封書4 手書4)

女流劇作家 小説家

橋田 互吾(東声) 高知県 一八八六—一九三〇

1通 昭和1 (葉書1 手書1)

歌人 正岡子規に傾倒 良寛を好む。

富士川 游 大分県 一八六五—一九四〇

1通 大正1 (封書1 手書1)

医学者「日本医学史」で学士院恩賜賞受賞。

松根東洋城(豊次郎) 東京都 一八七八—一九六四

1通 昭和1 (封書1 手書1)

「ホトトギス」俳人 漱石の松山中学時代の生徒。国民新聞の俳壇、後に朝日新聞の俳壇を主幹。「洪柿」を創刊。漱石の十弟子の一人と言われた。

松崎 天民(市郎) 岡山県 一八七八—一九三四

9通 大正1 昭和8 (封書3 葉書6 手書7 印刷2)

新聞記者 苦学中蘇峰に見出され国民新聞社会部記者となる。社会ルポの先駆者。

松岡 謙 新潟県 一八九一—一九六九

1通 昭和1 (封書1 手書1)

小説家 漱石の長女筆子と結婚。

真鍋嘉一郎 愛媛県 一八七八—一九四一

2通 昭和2 (封書1 葉書1 手書1 印刷1)

医学者 漱石の松山中学時代の生徒。東大医学部教授、レントゲンと温泉治療の先駆者。漱石の主治医。

牧野 謙吉

2通 昭和2 (葉書2 手書2)

水落 露石(義一) 大阪 一八七二—一九一九

1通 大正1 (封書1 手書1)

俳人 漱石の友人 子規を師とする。

三木 露風(操) 兵庫県 一八八九—一九六四

2通 大正2 (封書2 手書2)

詩人 童謡「赤とんぼ」の作者。トラピスト修道院から

森田 草平(米松) 岐阜県 一八八一—一九四九

1通 昭和1 (封書1 手書1)

小説家 漱石に師事。平塚らいてうとの恋愛事件に取材した『煤煙』を、漱石の斡旋で朝日新聞に連載。漱石の東京帝国大学文科大  
学講師在職中の学生。漱石の十弟子といわれた一人。

森 鷗外(林太郎) 鳥根県 一八六二—一九二二

13通 明治10 大正3 (封書13 手書13) このうち10通は中島司、1通は  
並木仙太郎による謄写

小説家 評論家 陸軍軍医総監「文学会」に出席。「国民之友」に「於  
母影」「舞姫」などを発表。蘇峰は多くの面で才能を褒めていた。  
2通は「関係文書1」に収録。

森 次太郎(圓月) 愛媛県

67通 昭和67 (封書52 葉書15 手書67)

漱石、子規、虚子の友人。俳句の好きな人。東洋協会。

山県五十雄 滋賀県 一八六九—一九五九

15通 大正8 昭和7 (封書10 葉書5 手書14 印刷1)

英文記者 国際通信京城通信員 ロンドンタイムズ国際通信員

山田 卓爾

2通 昭和2 (封書1 葉書1 手書1 印刷1)

和田 万吉 岐阜県 一八六九—一九三四

3通 大正1 昭和2 (封書3 手書2 印刷1)

国文学者 図書館学者 東大教授

#### 四、当館所蔵の書簡を中心とした蘇峰・逍遙・鷗外・漱石・

##### 露伴の交遊図

※次の図表は以下の条件で作製した。

(1) 当記念館に蘇峰宛書簡がある人を基本とする。

(2) 漱石に関しては、『漱石全集』(岩波書店 昭和四十一年)第14・15巻  
「書簡集」と、『森鷗外・夏目漱石・三木露風未発表書簡集』(近代文学  
研究資料叢書 昭和四十七年)に収録されている人

(3) 森鷗外に関しては、『鷗外全集』(岩波書店 昭和五十年)第36巻「書  
簡集」と『鷗外をめぐる百枚の葉書』(森鷗外記念会 平成四年)に収  
録されている人。

(4) 幸田露伴に関しては、『露伴全集』(岩波書店 昭和三十一年)第39巻  
「書簡集」と幸田文『露伴の書簡』(弘文堂 昭和二十六年)に収録さ  
れている人。

(5) 坪内逍遙に関しては、全集に書簡集の巻がないので、『坪内逍遙研究  
資料』(財団法人 逍遙協 昭和四十四—五十年)第一—六集を参考に  
したが、他の人に比べいかにも狭い範囲なので、逍遙協会の菊池明  
先生に、来簡か往簡がある人に◎印をつけていただいた。

この図表は、あくまでも存在する又は活字化されている来簡か往簡をも  
とに作製したものである。(論文を読んで蘇峰と係わりがあり、四文豪と  
も係わりのある人は他に多くいるが、書簡史料の有無で決めるほかに当記  
念館としての役割はないので、その様にした)。

五人ともに書簡の交換があったのは蘇峰、逍遙、鷗外、巖谷小波、内田  
魯庵、佐々木信綱である。五人のうち四人と交換があった人は漱石(露伴  
になし)、尾崎紅葉(漱石になし)、大橋新太郎(漱石になし)、金子薫園(露伴  
になし)、高浜虚子(逍遙になし)、田山花袋(逍遙になし)、森田思軒(漱石に  
なし)、饗庭篁村(漱石になし)、である。

四文豪の知己と蘇峰との書簡交換は一二六人に及ぶが、紙面の都合で四  
十人に関してのみ表記した。残り八六人は二人と書簡交換のあった人々で  
ある。

#### 四、 四文豪と蘇峰の書簡の有無による交遊図

◎印は逍遙協会の菊池明先生による

	坪内逍遙	森 鷗外	徳富蘇峰	夏目漱石	幸田露伴
櫻庭篁村	○	○	○		○
姉崎正治			○	○	○
池辺三山	○		○	○	
巖谷小波	○	○	○	○	○
飯島茂		○	○	○	
井上通泰		○	○		○
内田魯庵	○	○	○	○	○
尾崎紅葉	○	○	○		○
大橋新太郎	○	○	○		○
大村西崖		○	○	○	
岡倉天心	◎	○	○		
落合為誠		○	○	○	
幸田露伴	○	○	○		
賀古鶴所		○	○		○
金子薫園	◎	○	○	○	
久保田米斉	○	○	○		
斎藤茂吉		○	○	○	
佐々木信綱	○	○	○	○	○
春陽堂	◎		○	○	
関根正直	◎		○	○	
高浜虚子		○	○	○	○
瀧田樗陰	◎		○	○	
高田早苗	◎	○	○		
高野辰之	◎	○	○		
田山花袋		○	○	○	○
近松秋江	◎		○	○	
中央公論	◎		○	○	○
坪内逍遙		○	○	○	○
土井晩翠	◎		○	○	
徳富猪一郎	○	○		○	○
夏目漱石	◎	○	○		
中村不折		○	○	○	
中西梅花	○	○	○		
長谷川時雨	◎		○	○	
二葉亭四迷	○	○	○		
森 鷗外	○		○	○	○
森田思軒	○	○	○		○
山田美妙	○	○	○		
横山大観		○	○	○	
読売新聞			○	○	○

## 五、四文豪と蘇峰の略年譜

逍遙、鷗外、蘇峰、漱石、露伴の年譜（『明治文学全集』筑摩書房）を重ねて、主に明治二十年代と四十年代を抜き出し、当館の史料と合わせて略年譜とした。年長の逍遙から年少の露伴の差は八歳である。同じ時代を生きた文士たちであったことになる。

明治二十三年「国民新聞」を創刊した蘇峰が、逍遙、鷗外、露伴と文学会で歓談していた時、漱石は何をしていたのだろうか。漱石は文部省貸費生で、年額八十円が貸与されていた学生であった。同じ歳の露伴が、「露伴々々」「風流仏」「一口剣」などを発表し、文壇の大家と目されかけていた頃である。蘇峰が日清戦争の報道に熱中しているとき、漱石は鎌倉の宗演のもとで座禅をしていた。「国民之友」が廃刊になった明治三十一年、虚子は「ほととぎす」を松山から東京に引き取り、発行人となった。七年後「ホトトギス」は漱石の『吾輩は猫である』の発表の場となった。

明治四十年、漱石が朝日新聞に入社したころ、蘇峰は中国旅行をし、数の偉大さを目の当たりにして、新聞の大衆化を決意した。それが国民新聞の質を保つために、「国民文学欄」を設けようとした遠因になったといわれる。明治天皇が崩御されたとき、蘇峰は五十歳、国民新聞主幹二十二年のベテラン記者であった。四十六歳の漱石は、朝日新聞入社五年半の時であった。

蘇峰が世に影響力を持っていた時期を『将来の日本』を出版した明治十九年から、敗戦の昭和二十年までとすると、五十九年間である。漱石は明治三十八年『吾輩は猫である』を発表したときからとすると、大正五年十二月に死亡するまで、十一年という短い間である。明治の年に五を加えると蘇峰の歳になる。逍遙は九、鷗外は六、漱石と露伴は一を加える。

その人の歳を知って作品や行動を見ると、理解が深まることや、意外に思うことなどがあり面白い。

逍遙（雄蔵） 安政6年（一八五九）名古屋で生まれる。5男

鷗外（林太郎） 文久2年（一八六二）鳥根県津和野に生まれる。長男

蘇峰（猪一郎） 文久3年（一八六三）熊本に生まれる。第5子長男

漱石（金之助） 慶応3年（一八六七）東京に生まれる。5男末子

露伴（成行） 慶応3年（一八六七）東京に生まれる。第4子

明治元年 逍遙10歳、鷗外7歳、蘇峰6歳、漱石2歳、露伴2歳。

蘆花生まれる。2歳の漱石、養子に出される。

明治4年 逍遙、このころから貸本屋大惣に出入りして江戸文芸を耽読。

明治5年 6月 鷗外上京。西周邸に寄寓。

明治9年 8月 蘇峰熊本洋学校閉鎖にともない退学。上京、東京英学校（一

高の前身）に入学。逍遙泉の選拔生となって上京、開成学校普通科に入学。

10月 蘇峰金森通倫との文通の結果、父母に無断で新島襄の同志社英学校に入学。

明治10年 開成学校は東京大学、東京英語学校は東京大学予備門と改称される。9月 逍遙大学予備門の最上級に編入、高田早苗と親しんだ。鷗外東京大学医学部の本科生となる。賀古鶴所が同窓。

明治11年 逍遙英国小説を多く読む。

明治12年 露伴東京府立第一中学に入学、学友に後の川上眉山がいた。

明治13年 5月 蘇峰同志社卒業直前に退学東京に向かう。露伴中学を中退東京図書館に通い読書に熱中した。淡島寒月を識る。

明治14年 逍遙神田の下宿で初学者に英語を教える。露伴銀座の東京英学校（のちの青山学院）にはいる。漱石二松学舎に転校、漢学を学び同学を卒業。

明治15年 9月 蘇峰熊本に大江義塾を開く。東京専門学校（のちの早稲田）が設立され高田早苗が関与した。露伴夜菊池松軒の漢学塾へ通う。

明治16年 8月 露伴「給費生となって自ら支へたる也」と芝の電信修技学校に入る。9月 逍遙高田早苗の勧誘で東京専門学校（のちの早稲田）の講師となり、外国歴史、

憲法論の訳解を担当、10月 文学博士の称号を受ける。

明治17年 8月 鷗外陸軍省から衛生制度調査及び軍隊衛生学研究のためドイツ

ツへ官費留学を命じられる。22歳の蘇峰18歳の静子と結婚。

明治18年 道遥6月から「当世書生氣質」を17冊分冊で晚青堂から刊行。9月から「小説神髓」を9冊の分冊で松月堂から刊行。7月露伴技手の資格で北海道余市に赴任。

明治19年 10月蘇峰『将来之日本』を刊行、その好評により一家をあげて12月初め上京。10月28歳の道遥22歳のセンと結婚。二葉亭 篁村 矢崎嵯峨の屋などと相識る。

明治20年 2月蘇峰民友社を設立、総合雑誌「国民之友」を創刊。道遥読売新聞の客員となる。8月露伴余市を脱出(3年間北海道に勤務する義務があった)、東京に帰り父母の不興をかう。淡島寒月から西鶴本を借り筆写。8月24歳の二葉亭が「新日本之青年」を読んで感激、長文の書簡をたずさえ蘇峰を訪問兄侍したいと言う。10月蘇峰27歳の森田思軒の紹介で55歳の依田学海を訪問。「文学会」の構想が森田思軒 朝比奈知泉 依田学海 竹越与三郎 矢野文雄 志賀重昂 蘇峰の間で作られた。

明治21年 1月漱石夏目姓に復籍。9月8日蘇峰 思軒 知泉の主唱により文筆家集団である「文学会」第一回が芝公園の三縁亭で開かれた。会費50銭で夕食を共にし、後に一人か二人が口演し話し合う「文学会」は、当時の精選気鋭の文筆家の集まりであった。第一回出席者は依田学海 坪内逍遙 山田美妙 内田周平 森田思軒 朝比奈知泉 竹越与三郎 久米幹文 矢野龍溪 高橋五郎 徳富猪一郎(志賀重昂 二葉亭 菅了法欠席)。蘇峰は道遥 美妙と初対面。漱石文学者になる決意をし文科に進学、英文学の専攻を志す。9月8日 鷗外ドイツから帰国、陸軍軍医学教官に任命される。ドイツから女性が後を追って来たが会わずに帰国させた。11月道遥「細君」を起稿。12月露伴小説「露団々」を書き寒月の紹介で依田学海の関を乞う。学海「求めずとも必ず序文をつくるべし」と賞賛、原稿は金港堂に50円で売れた。その金で中央電信局時代の先輩を訪ねる。

明治22年 1月道遥の「細君」が、「国民之友」の新年付録に美妙の「蝴蝶」、思軒の「探偵ユーベル」と共に掲載された。漱石同年の子規を知り、文学上の影響を受けた。道遥1月14日に万代軒で開かれた民友社主催の、酒井雄三郎の渡仏送別会に出席。2月露伴の「露団々」が「都の花」に載りはじめ、都の花の主筆、22歳の山田美妙が天才だと露伴の登場を賞賛。3月鷗外海

軍中将赤松則良の長女登志子と結婚。5月ごろ露伴「風流仏」を刊行。鷗外妹小金井喜美子 弟篤次郎 市村讚次郎 井上通泰 落合直文らと文学会合を催し新声社(S・S・S)と名づけた。道遥5月4日と6月8日の「文学会」に出席。鷗外8月「国民之友」夏期付録に「於母影」(新声社訳)を発表。10月「於母影」の稿料50円を基金として「しがらみ草子」を創刊。11月16日の「文学会」に道遥 美妙 篁村 学海 思軒 嵯峨の屋 小波 組葉 思案 蘆花 通泰 柳浪 眉山 忍月 知泉 直文 讚次郎 蘇峰等30名が出席。12月道遥読売新聞の文学上の主筆として高田早苗を助けることになる。露伴読売新聞の客員となる。

明治23年 1月宮崎湖処子と内田魯庵民友社に入社。鷗外処女作「舞姫」を「国民之友」新年付録に発表。「舞姫」に関して石橋忍月と論争。1月11日の「文学会」に道遥 露伴 魯庵 梅花 紅葉 淡島寒月 忍月 通泰 尾崎行雄 須藤南翠 宮崎湖処子ら出席。新島襄47歳で死去。2月蘇峰「国民新聞」を創刊。漱石東京帝國大学英文科に入学、文部省貸費生となり年額80円が貸与される。漢詩を作っていた。4月露伴、饗庭篁村 中西梅花 高橋大華と旅に出る。5月「井原西鶴」を「国民之友」に発表。6月25歳の中西梅花、国民新聞社に月給25円で入社(23歳の内田魯庵の勧誘と友情による)。3ヵ月で退社。8月9日の「文学会」に露伴 篁村 矢野文雄 末広鉄腸ら出席。8月露伴「一口劍」を「国民之友」夏季付録に発表。9月魯庵退社。鷗外長男於兔が生まれた直後離婚。9月13日の「文学会」に露伴 末松謙澄 思軒 森槐南 国分青崖 文雄ら出席。11月露伴「国会新聞」に入社。

明治24年 3月中西梅花の「新体梅花詩集」に鷗外が題言を、思軒と蘇峰が序文を、露伴が抜を書く。10月道遥自ら主宰者になって「早稲田文学」を創刊。12月鷗外と道遥翌6月まで没理想論争を展開。12月露伴三崎に遊び鷗外 賀古鶴所 井上通泰らと年を越す。

明治25年 鷗外慶応義塾大学美術学嘱託講師となる。

明治26年 漱石鈴木大拙の依頼でシカゴで開かれる世界宗教会議で講演する、35歳の釈宗演の原稿「仏教小史」の英訳を補筆訂正。東京高等師範学校英語教授に就任。

明治27年 日清戦争には蘇峰国民新聞社をあげて協力。12月道遥「早稲田文学」に「小説家は実験を名として不義を行ふの権利ありや」を発表し27歳の

山田美妙を攻撃。12月末、漱石鎌倉の円覚寺の塔頭帰源院に入り翌年1月まで宗演のもとで参禅。

**明治28年** 蘇峰三国干渉を機に軍備拡張の必要を唱える。四月漱石松山中学校の教諭に赴任。日清戦争従軍から病気のために帰郷した子規が同居、句作に熱中。7月22歳の虚子、松山中学教師をしていた漱石を訪ねる。5月鵬外台湾の反乱鎮圧に転征、10月4日に東京に凱旋(石黒忠恵の書簡あり)。陸軍軍医学校長に復職。

**明治29年** 4月漱石熊本第五高等学校講師を任ぜられ、松山中学を辞任。6月20歳の鏡子と結婚。5月蘇峰26歳の深井英五と共に新聞事業視察のため欧米漫遊に出発。12月虚子「国民新聞」俳壇の撰者となる。

**明治30年** 8月蘇峰松方内閣の内務省勅任参事官となり、変節漢と非難を受ける。9月漱石蘇峰の友人で漢詩人の落合東郭の大江村の家を借りる。

**明治31年** 2月27歳の佐々木信綱「心の華」を發刊、門下から川田順、九条武子などが出る。3月漱石落合東郭が帰郷したため転居。鏡子のヒステリ1とつわりがひどかった。8月「国民之友」廃刊。9月高浜虚子経営困難になった松山の「ほととぎす」を東京に引き取り、続刊しようとした。10月虚子が発行人となり「ホトトギス」發行。子規の協力を得る。

**明治32年** 1月勝海舟76歳で死去。3月道遥文学博士の学位を受ける。鵬外陸軍軍医監となり小倉師団軍医部長に任命され小倉に赴く。

**明治33年** 5月漱石文部省より英国留学の辞令を受ける。9月出航。道遥9、10月尋常小学校、高等小学校用の「国語読本」を富山房から刊行。蘇峰に批評を求めた書簡あり。12月虚子「国民新聞」の俳句撰を辞す。

**明治34年** 2月福沢諭吉66歳で死去。ロンドンの漱石下宿にこもって「文学論」の著述に専念、神経衰弱が深まる。

**明治35年** 1月鵬外23歳の茂子と再婚。9月道遥早稲田中学の校長になる。子規36歳で没す。

**明治36年** 1月漱石帰国。3月本郷(前鵬外居住)に住む。第一高等学校講師、帝国大学英文科講師兼任。

**明治38年** 1月露伴「日本新聞」の客員となる。2月「ホトトギス」を盛り立てるため虚子が漱石にすすめて書かせたといわれる「吾輩は猫である」が、「ホトトギス」に連載され始める。10月漱石中村不折の挿画で刊行。道遥

文芸の新運動を起こすため大隈重信を推載して文芸協会の設立を企てる。

**明治39年** 1月道遥第2次「早稲田文学」創刊。4月漱石「坊っちゃん」を「ホトトギス」に発表。1月鵬外小倉から東京に帰る。5月蘇峰、日露戦後の朝鮮、満州、中国を視察のため伊達源一郎と旅行。中国旅行中、民衆の「数の偉大なる勢力」に驚嘆、新聞の大衆化を決意。6月鵬外山県有朋を發起人として歌会常盤会を結成。賀古鶴所と共に幹事となる。漱石面会日を木曜日とする(木曜会の始まり)。

**明治40年** 2月漱石に東京朝日新聞社招聘の話が始まる。朝日新聞社主筆44歳の池辺三山の訪問を受け、三山の意気を感じて入社を決意。4月漱石東京帝国大学講師を退職して朝日新聞社に入社(月給二百円)。5月「思軒全集」に露伴、蘇峰序を寄せる。6月漱石、59歳の西園寺公望首相の文士招待会、兩声会の出席を断る。明治21年の「文学会」に出席していた人で招待された人は、巖谷小波、内田魯庵、川上眉山、幸田露伴、広津柳浪、森鷗外、二葉亭四迷、竹越与三郎の8名で、二葉亭、道遥、漱石が欠席した。二葉亭は「文学会」に「折角御案内に預候処、チト差し支え之有り」と欠席したが、「兩声会」にも「首相の招待に応せざりしはいやであったから也」(内田魯庵宛)と欠席。漱石は「当日は無拠処、差支有之出席仕兼候」と欠席。道遥は旅行せねばならぬと断わった。鵬外と露伴は出席。漱石胃痛に悩み始める。

道遥早大創立25周年祝賀に際し、終生年金の贈与を受ける。鵬外3月から与謝野鉄幹、伊藤左千夫、佐々木信綱らを招いて諸派の合流、革新を計り、毎月1回観潮樓歌会を自宅で開催。10月鵬外陸軍軍医総監となる。

**明治41年** 2月虚子「国民新聞」に「俳諧師」の連載を始める。10月虚子「国民新聞」に入社。文芸部長に就任、「国民文学欄」を創設。「国民新聞」の俳壇の撰を31歳の松根東洋城に任せる。3月漱石の弟子森田草平と日本女子大学卒業生平塚雷鳥の心中未遂事件が起こる。漱石後に草平にこの事件を書くことを勧め、その作品「煤煙」は朝日新聞に漱石の周旋で連載された。9月蘇峰大浦兼武と相談、勉強館を社屋の3階につくる。11月漱石「国民文学欄」に虚子を通じて執筆を頼まれ「田山花袋君に答ふ」を発表。

**明治42年** 1月蘇峰「百人一首」森大狂校訂民友社から三百部写真石版で公刊。同好の諸士に贈呈。西園寺公望、釈敬俊、芳川顕正、石黒忠恵、末松謙澄、高島張輔、落合為誠、夏目漱石(2月9日付)、湯浅吉郎、大槻如電、幸田露

伴 森鷗外等23名からの礼状あり(巻物状態)。11月「朝日新聞」に「朝日文芸欄」が設置された。主宰は夏目漱石、森田草平編集。漱石の「遺美人草」が掲載された。

明治43年 3月 鷗外永井荷風を慶応義塾文学科の教授に推挙。荷風主幹で「三田文学」が創刊された。鷗外の主な発表機関となる。10月 蘇峰朝鮮の「京城日報」の監督の任につく(大正7年まで)。漱石胃潰瘍ようで入院。漱石の朝日新聞入社その他の事情で「ホトトギス」の読者が激減したため、秋、虚子挽回を期して国民新聞社を退く。

明治44年 2月 漱石文学博士号授与を辞退。8月 蘇峰桂内閣の奏薦により貴族院議員に勅任される。池辺三山が社内問題で朝日新聞を辞任。10月 そのため朝日の文芸欄が廃止された。

明治45年(大正元年) 7月30日 明治天皇崩御。8月 蘇峰「奉悼の辞」を国民新聞に発表、「明治天皇仰景図録」を出版。漱石「明治天皇奉悼之辞」を「法学協会雑誌」に発表。

大正2年 蘇峰桂太郎の死後、政界から離れ新聞事業に専念する。漱石胃潰瘍よう再発、南風風水彩画に熱中し、津田青楓と親交。

大正3年 5月 蘇峰の父一敬93歳で死去。7月 第一次世界大戦始まる。漱石「ころ」を岩波から自費出版。良寛の書を集集。

大正4年 大隈内閣は言論尊重内閣として初めて新聞人の叙勲を行い、蘇峰村山龍平 本山彦一 黒岩涙香が勲三等に叙せられた。8月 道遥高田早大 学長の文相就任を機に早大教授の職を辞す。漱石胃病で寝込む。24歳の芥川龍之介、25歳の久米正雄らが門下生となる。

大正5年 蘇峰桂太郎の伝記資料収集のため山口を訪問。5月 中央公論に「文壇に復活せる徳富蘇峰」が特集される。漱石真鍋嘉一郎を主治医に治療を受けたが、12月9日、50歳で死去。青山斎場で葬儀。導師は釈宗演、戒名は「文献院古道漱石居士」。雑司ヶ谷墓地に埋葬。

大正7年 5月 蘇峰「近世日本国民史」起筆。

大正11年 鷗外7月9日、61歳で逝去。法号「貞献院殿文穆思齋居士」。遺骨は向島弘福寺に納められた。墓表の5文字遺言により中村不折の書。

大正14年 6月 蘇峰帝国学士院会員になる。

大正15年(昭和元年) 7月 道遥「道遥選集」を春陽堂から刊行。その印税を

演劇博物館設立資金に宛てることとした。蘇峰お祝の会で講演。

昭和2年 露伴学士院会員に選ばれる。

昭和3年 5月 双柿舎の道遥書屋が落成。

昭和4年 4月 道遥「沙翁全訳」に至りし顛末」を発表。

昭和10年 2月 道遥77歳で逝去。法名「双柿院始終道遥居士」。熱海海蔵寺に埋葬。

昭和16年 12月 太平洋戦争起こる。

昭和17年 5月 80歳の蘇峰「大日本文学報国会」の会長に就任。12月「大日本言論報国会」の会長に就任。

昭和20年 8月 敗戦。12月 蘇峰A級戦争犯罪容疑者に指名される。

昭和22年 7月 露伴81歳で逝去。

昭和27年 4月 90歳の蘇峰、公職追放解除される。『近世日本国民史』百巻完成。

昭和32年 11月2日、蘇峰熱海で95歳で逝去。遺言により赤坂靈南坂教会において、小崎道雄牧師司式で、キリスト教式の葬儀が行われた。

戒名「百敗院泡沫頂蘇居士」。

今年の目録は漱石に係わる資料を主に作成した。蘇峰・漱石の共通の知己が四十六名と、想像より多かったのに驚いている。一通しかない人でも、内容が豊かで、一通しか残っていないのが不思議であるような人が多い。

紹介したい書簡が多く困ってしまった。森次太郎の67通の書簡、釈宗演の40通の書簡の紹介ができなかったのは残念である。

学芸員 高野静子 作成

六、平成六年度 展示書簡一覽表

〈あ〉	川田 順 S32.11.2	近松 秋江 S*.1.19	〈ふ〉
饗庭 篁村 M24.10.24付	〈き〉	〈つ〉	二葉亭四迷 M21.9.7
会津 八一 T14.2.10	木下奎太郎 T14.12.6	坪内 逍遙 M21.9.22	〈ま〉
朝比奈知泉 M21.11.17	木久正謙吉 M42.2.9	〈と〉	松岡 讓 S7.1.24
安倍 能成 S21.2.21	〈く〉	徳富 蘇峰 S28.*.*	松崎 天民 S5.6.28
淡島 寒月 M26.1.1	九条 武子 M*.4.21	徳富 静子 T4.8.5	真鍋嘉一郎 S14.3.26
姉崎 正治 T15.10.27	〈こ〉	徳富 一敬 M42.2.2	〈み〉
麻田駒之助 S4.7.8	幸田 露伴 M23.7.12	徳富 久子 M22.7.*	三木 露風 T11.2.26
有島 生馬 S17.2.18	小中村義象 M24.4.11	徳富 蘆花 M30.1.8	水落 露石 T7.10.8
〈い〉	〈さ〉	徳富 愛子 S16.9.8	宮崎湖処子 M29.12.3
石黒 忠庵 M28.9.11	西園寺公望 M42.2.11	土井 晚翠 S21.12.17	〈も〉
池辺 三山 M*.7.23	佐々木信綱 M42.4.1	戸川 秋骨 T15.2.11	森 槐南 M42.2.25
巖谷 小波 M36.5.23	斎藤 茂吉 T15.5.8	鳥居 素川 T9.12.6	森 鷗外 M23.9.29
市村讚次郎 M43.7.17	嵯峨の屋おむろ M23.9.24	富岡 謙三 M42.2.7	森田 思軒 M22.3.*
石橋 忍月 M21.8.29	〈し〉	〈な〉	森田 草平 S16.8.11
井上 通泰 M24.2.26	釈 宗演 T5.4.8	中江 兆民 M21.8.14	森 次太郎 S20.12.5
〈う〉	釈 敬俊 M42.2.6	夏目 漱石 M42.2.9	〈や〉
内田 魯庵 M23.5.31	志賀 重昂 M21.10.11	中村 不折 (不明)	安田 鞆彦 S20.12.7
〈お〉	〈す〉	中西 梅花 M24.9.26	山県 有朋 M43.7.*
岡倉 天心 M36.5.29	杉浦 重剛 M43.2.20	永坂 周二 M42.2.12	矢野 龍溪 M23.8.8
尾崎 紅葉 M25.1.1	菅 了法 M21.9.27	〈に〉	矢島 楫子 T10.2.26
大西 祝 M24.3.13	末松 謙澄 M42.2.11	新島 襄 M21.11.1	山田 美妙 M27.4.18
大村 西崖 T11.4.7	末広 鉄腸 M23.8.8	〈の〉	〈ゆ〉
落合 東郭 M42.2.7	杉村楚人冠 S7.12.23	野上豊一郎 T15.3.25	湯浅 半月 M42.2.8
大槻 如電 M42.2.11	鈴木 子順 M42.2.6	野口一太郎 M23.8.8	〈よ〉
大橋新太郎 S13.4.30	〈た〉	野村 伝四 M31.4.10	依田 学海 M20.10.25
〈か〉	高田 早苗 T*.1.25	〈は〉	芳川 顕正 M42.2.13
勝 海舟 M29.*.*	高浜 虚子 T9.6.28	橋本 雅邦 M*.*.*	与謝野晶子 T*.3.11
川端 龍子 S19.9.30	竹越与三郎 M20.6.28	原田直次郎 M2*.9.6	与謝野鉄幹 T11.7.10
金子 薫園 T14.1.13	瀧田 樗陰 T12.12.5	長谷川時雨 S11.5.4	〈わ〉
賀古 鶴所 T13.9.20	田辺新之助 M42.2.11	〈ひ〉	渡辺 信 M42.2.6
堅山 南風 S19.9.*	〈ち〉	平福 百穂 M44.3.4	